

山際塾長のこだわり教育論 3

子どもをほめていますか?③

前回までで、子どもはほめられることで必ず伸びる、ほめ惜しみをしないで、気前よくほめましょと書きました。

「やまぎわ塾長のこだわり教育論」で、子どもは叱るよりほめることで伸びるとこれまでも述べさせていただきました。

やはり「叱るよりほめる」に塾長山際は強くこだわりたいと思っております。

年間を通して行っている個人懇談会でも、意識的にほめることで子どものやる気がでてきたようだ、というお母様方からの声をお聞きしております。

「頑張ってほめるようにしていたら、このごろ子どもが自分から進んで机に向かうようになってきた。」「親子の争いが減って和やかな家庭の雰囲気になってきた。」「用事やお手伝いなどを喜んでするようになってきた。」などです。

また同時に、「何とか子どもをほめるようにしているのですが、なかなかうまくいきません。」というお声もいくつか寄せられています。

では、ほんとに子どもはほめるだけで伸びるのでしょうか？

「ほめるだけでなく、叱ったり、しつめたり、というのも大切なのでは？」等と感じておられるお母様方も少なくないでしょう。

もちろん子どもをより良い人間に「育てる」ためには、「ほめる」だけでなく
「叱る」ことも大切です

「叱るよりほめること」ということの意味は、全く叱らずにただほめるだけでいいということではなく、叱る回数よりもほめる回数を大幅に増やしましょうということ、そして子どもの欠点や悪いところばかりを改めさせようと思わずに、良いところや長所をさがしてそれを伸ばすようにしましょう、ということなのです。

子どもにとってこれは良い、と思えることは、ほめて、それを伸ばし続けさせ、進展させます。しかし子どもにとってこれは悪い、やめさせたい、と思えることには、叱ることで、やめさせるなり軌道修正なりをしなければなりません。

教え導き、そして上手に叱ることは、ほめることと同じくらい大切です。たくさんほめることは、少なく 叱ることの効果を高めるためでもあるのです。

「叱る」と「怒る」はちがいます

じょうずに「叱る」ことは大事ですが、それは「怒る」や「キレる」こととは違います。

子どもをよくしたいために、子どもをガミガミ叱りつけているお母様がおられます。ついつい感情的になってしまって、「叱る」のではなくて「怒る」になってしまっているのです。これでは逆効果です。

「もう！あなたはちっとも勉強しないのね！いつもダラダラして！なまけてばかり！ダメな子ね！ちよっとは勉強したらどうなの！」
と自分の不快な感情を我慢できずに、子どもにただぶっつけているだけでは、肝心の内容やポイントが子どもにうまく伝わっていきません。

子どもにとっては、ただ「自分はダメなんだ」というマイナスイメージだけが残り、自信を失い、やる気をなくしていくだけという結果になってしまいます。

ほめるとは感心と感謝と喜びを伝えること

ほめることとは、子どもの「がんばり」をきちんと認めてあげることでもあります。半歩でも前に進んでいたら、「すごいね！」「頑張っているね！」と感心してあげましょう。

また子どもへの感謝も大切です。「ありがとう」の言葉が飛び交うご家庭では、子どもは生き生きと育ちます。

子どもの成長や向上を親は心から喜んでいる、ということを子どもにきちんと伝えましょう。そんなことは当たり前だと親は思っている、子どもはそうは感じていないことがあるのです。

テスト結果を「よくできたね」と評価するとともに、「(大好きなあなたが) がんばって成長していることが嬉しい！」と喜びを伝えることで、子どものやる気はさらに高まることでしょう。